# 野獣

天崎　剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
野獣

【Ｎコード】
Ｎ２１３１Ｃ

【作者名】
天崎　剣

【あらすじ】
「野獣」それは、圧倒的科学力で作られた、殺戮者。肉体改造により野獣に変えられた魁は、あるとき、美しい女性、和泉に出会う。巻き込みたくない、そんな想いとは裏腹に、彼女への思いは募り、深みにはまっていく。同居する澪と和泉の間で揺れ動く魁の心。更に研究所の柳澤の魔の手が和泉に迫り……！【完結】

# 第1話

摩天楼の頂(いただき)で、獣が吠える。――しかし、その声は、ひゅうひゅうと吹き荒(すさ)ぶビル風に掻き消される。

夏とはいえ、夜風は冷たく、獣の身体に容赦なく突き刺さる。獣はぶるっと、大きく震え、ふと振り返った。屋上に散らばる死体。風に煽られ漂う血の臭いが、彼の興奮を加速させる。堪(こら)えきれず、肉を漁(あさ)りだす。

「魁(カイ)、また、自分を見失って……、だめじゃない」

女の声にハッとし、獣が後ろ足でのっそりと立ち上がる。――もしかしたら、それは、人間に近いのかもしれない。二メートル近い巨体が、闇の中でゆらりと動く。そして、屋上の入り口から、ゆっくりと姿を現した女性にぎらぎらと輝く視線を向ける。

「ほらほら、いつまでそんな姿でいるつもり？　世話が焼けるんだから」

死体を乗り越えて、女が獣へと歩み寄る。小柄な、若い、髪の短い女だ。

獣は女に牙を向け、唸(うな)る。が、彼女はそれをものともせず、背伸びして、獣の頭をそっと撫ぜた。柔らかな動物の毛が、彼女の指の間に入り込む。

暗闇ではっきりとはしないが、それは、狼のような顔をして、身体のあちこちに、銀色に光る防具のようなものを付けている。

「いい子だから、おうちに帰ろう」

彼女の言葉に安心したのか、獣は唸るのをやめ、穏やかに目を閉じた。身体を覆っていた武具と、獣の毛がすぅーっと身体の中に吸い込まれるように消え去り、獣だった個体は若い人間の男になった。

男は力が抜け、ぐったりした身体を彼女に預けた。自分よりも重い、彼の全体重が、華奢(きゃしゃ)な女の身体にどっしりとのしかかる。

「馬鹿……、ここまでして、『野獣』になりきらなくったって、い

いんだよ……。人間に、戻れなくなるよ……？」
今にも泣き出しそうな、か細い声に答えるように、男は優しく、彼女を抱きしめた。互いのぬくもりが、心を癒していく。
「ゴメン……、澪（レイ）。また、やっちゃったのか……」
「魁、あんたの仕事は殺すところまででしょ？　肉は食べなくていいの。また柳澤の奴になんか言われるよ？」
「……だな」
男の口の中に、まだ、血の味が残っていた。

鉄道高架橋に寄り添うように建てられた、下町のボロアパートが、彼らの帰る家だった。六畳一間。簡易的な台所と、トイレ付きの古ぼけたユニットバスが各部屋についているのが、唯一の救い。築三十年を優に越えているため、見るからにみすぼらしく、汚らしい。ところどころカビで黒ずんだサッシ。まともにカギがかからない建て付けの悪いドア。ゴキブリや、蛙、蜘蛛まで一緒に暮らしている有様。水周りの水カビや黒ずみ、トイレの汚れはもう何十年もそのままで洗おうとしても簡単に取れるものではなく、放って置かれている。
それでもそこは、唯一彼らが落ち着ける場所。例え電車が高架橋の上を通るたびに、二階の彼らの部屋が大きく地震のように揺れようが、騒音でまともにぐっすり眠ることができなかろうが、関係ない。当たり前のように、その部屋へと戻ってくる毎日。
金も、貯えもない。その日暮らし。それでもよかった。
この部屋の前の持ち主が置いていった、卓袱台（ちゃぶだい）と、箪笥（たんす）が、唯一の家具。すっかりしなびてしまった、ふかふか感の一切ない、煎餅布団。二十一世紀とはとても思えない、貧乏暮らしだ。
魁は部屋に戻るなり、血まみれのシャツやズボン、下着を部屋のあちこちの脱ぎ捨てると、シャワーを浴びた。浴室の四角いタイルの隙間に水に溶けた赤いものが、筋になって伝っていく。流しても流しても、血の臭いは取れない。

「もう！　女性と一緒に生活している自覚を持ちなさいよ！」
澪はかんかんに怒り、汗と血の臭いで汚れきった彼の衣類を回収する。買い物用の白いビニル袋に、服を突っ込み、キュッと縛ると、
「やなぎさわ行き」と、マジックで走り書き。
「また柳澤の奴に処分してもらわないと……。簡単にこんなヤバイもん燃えるごみに出せないんだからね！　すぐに警察沙汰だよ！！
ちょっと？！　聞いてる？！」
シャワーを終えた魁が、彼女の声に気付き、バスルームから全裸のまま顔を出す。
「お前の話声がデカイことのほうが、ある意味ヤバイと思うぜ。他の住人に知れたらどうすんだ」
バスタオルでごしごしと髪の毛を乾かしながら、ワンドアの冷蔵庫を漁る。……半端になった麦茶の五百ｍｌペットボトルと、食べ残したコンビニ弁当があるだけの、貧相な中身。
魁はペットボトルを取り出すと、中身をぐいぐいと胃に流し込んだ。ちょうどよく冷えた麦茶が、喉に染みる。
「あのねぇ、私に偉そうな口を叩く前に、股間くらい隠しなさいってば！　魁って、本当にデリカシーないよね！」
ぷんぷんと仁王立ちで怒る澪に、使っていたタオルをポンと投げる。
「お前に気を使ってどうするんだよ。どうせ、俺とお前の仲じゃん」
「ま、そ……そりゃ、そうだけど……」赤くなる澪。
「なーんてな。六つも下の女なんか、女に見えねぇんだよ。俺の範囲外、範囲外」
「ぐ……」
二十五歳の魁から見ると、十九歳の澪は子供同然だ。
「うるさいうるさいうるさーい！！　言いながら、毎晩求めてくるくせに！」
澪は奇声を上げ、持っていたビニル袋を魁に突きつけた。
「これ。柳澤からどうせまた、すぐに連絡があるでしょ。回収頼む

ってあんたが言うのよ」
「はいはい」
受け取ったビニルを足元に置くと、箪笥から服を引っ張り出し、渋々着替えだす。

トゥルルルル……

卓袱台に置かれていた携帯電話が鳴った。
「柳澤か……、早速」
着替えながら電話に出る。
「はい。こちら、魁」
『もしもし、私だ。――魁、またしてもやってくれたな。かなりぐちゃぐちゃだったぞ。処理するほうの身にもなってみたまえ』
低い男の声。落ち着き、呆れているような話しっぷり。
「悪いね。ああなったら、俺にだってコントロール出来ないんだから、仕方ないだろ？」
『試験体だからって、言い訳は通用しないぞ。いつ警察に見つかるか、こっちだってハラハラしてるんだ』
「うるせぇ。あんたらの気まぐれゲームに付き合ってるこっちの都合はお構いなしかよ。第一、後処理はそっちの仕事だろ。……あー、そうだ。また、服の処分頼む。ちょっとごみには出せない状況なもんで」
『……またか。仕方ない。木曜日の午後にそっちに行く。そのときに』
「たのんますよー、教授」
『……嫌なものを押し付けるときだけ教授と呼ぶのはやめろ。いつもは呼び捨てのクセに。まあいい。また仕事が入ったら連絡する』
ブツッと、そっけなく電話が切れる。携帯の画面を見ながら、あかんべーをする魁。
「いけすかねぇな。相変わらず。何とかなんないのかね、あの性格」

着替え終わり、やっとまともな二十代男性の姿になった。鋭い目と、針金が入ったような硬い黒髪が印象的。
「仕方ないでしょ、あれでも、私たちの雇い主なんだし。金貰ってんだから、文句言わないの」
澪は卓袱台の側に腰を下ろし、両手を組むと、ぐんとの伸ばして、そのままゆっくりと畳に寝そべった。埃を被った蛍光灯が、ゆらゆらと始発電車の振動で揺れる。
「それに、本当なら、死んでいるはずだったんだから。『野獣』になったとはいえ、命を取り留めてくれた柳澤には少なからず感謝してるよ、私は」
ボソッと、呟く澪の向かいに、魁は腰を下ろした。
「そんなの綺麗事だ。柳澤は俺たちを利用してるだけだろ」
「そりゃ、そうかもしれないけどさ……。『野獣』なんて、はっきり言って、ゴキブリみたいなもんじゃない。見えないとこにひっそり住んで、知らないうちにはびこっていて。見つかれば駆除される。それだけの存在だよ。危険は常に伴うけど、こうして二人とも辛うじて生きているんだから。それに、こんな生活でも、私は十分満足してる……」
澪が、そんなふうに言っても、魁は納得しなかった。
時代遅れの部屋で、二人はその後、暫く沈黙を通す。
澪の言う通りなのかもしれない。例え『野獣』なったとしても、生かされているとしても……、命があるだけでも、マシ。そう考えたほうが、気が楽になる。
魁は、澪に倣(なら)って、ごろんと横になった。
夜が少しずつ白んできた。蝉の声が少しずつ、大きくなる。
『野獣』たちは、少し遅い睡眠を、とり始めるのだった。

# 第2話

『野獣』、それは、人間と動物、機械とを掛け合わせた、キメラ生物。

人間と動物とで形成されるキメラ生物は、倫理上の観点……人間と動物の境を曖昧にしてはいけないことから、世界的に規制されている。が、研究者たちの中には、それでも尚、新たな生物の作成に意欲を燃やす者がいる。

柳澤生体研究所の柳澤圭司教授も、その規制を破って、研究を重ねていた一人。いや、柳澤教授だけではない。日本でも、いくつかの研究所で、内密にキメラの研究が行われていた。

柳澤教授は、彼らを外見から、『野獣』と呼ぶ。

それらは普段は人間の形(なり)をしているが、興奮状態・もしくは戦闘状態になると、獣へと変貌する。元が人間とは思えない程の強大な身体能力を持ち、毛むくじゃらで、金属製の防具を纏い、殺しあう獣人。身体には機械が組み込まれ、体内に武器が仕込まれている者もいる。

『野獣』は、同じように作成された別の研究所のキメラたちと戦うことで、存在し続けることができる。と、いうのも、キメラ生物を作っている研究所たちは、暗黙のルールを作り、お互いのキメラたちの優劣を争う、「ゲーム」をしているのだ。更に拍車をかけるのは、その資金援助に名乗りを上げる、有名企業や政治家、裏社会の住人の多さ。今や「キメラ・ゲーム」は、世界中の注目の的だった。

ところが、可哀想なことに、そのゲームの中心たる彼ら『野獣』には、権利というものがない。なぜならば、既に「死んだはずの者」たちを使っているからだ。身分証明も、戸籍もない。もしかしたら、今夜にも死んでしまうかもしれない、人間の形をした、ゲームの駒。

交通事故を起こし、死にそうになっていた魁は、柳澤に拾われ、『野獣』となった。『野獣プロジェクト』の第一弾の試験体として

改造され、もう、五年も『野獣』を続けている。
事故前の記憶は、何故かキレイに消えていた。自分がどこで生まれ、どこで育ったのか、二十年間の記憶が、すっぽり抜けている。思い出そうとすれば、激痛が走り、頭を抱え、座り込む。
『野獣』に、過去など不要なのだろう。「今、生き残ること」、それだけを考えていくために。

魁は前日の戦闘で汚してしまった服の替えを探しに、行きつけの古着屋へ行こうと、商店街を散策しているところを、キメラに襲われていた。鳥人間の形をしたキメラは、白昼堂々、魁を襲ったのだ。
「昼間は攻撃してはならない」ルールを破ったキメラは、人間の心を失っていた。人通りの殆どない、裏通りでの出来事とはいえ、魁の制止を振り切って、攻撃を続けるキメラを、放って置くわけにも行かず、仕方なく、応戦する。
人気のない屋上へと、『野獣』に姿を変えながら、雑居ビルの壁を駆け上った。もうひとつ、「一般人には知られてはいけない」というルールの遵守のため。
「最悪だな。どこの研究所のキメラだよ……。こんな精神レベルの低いものをつくるのは……」
五年のキャリアがあるとはいえ、真昼間に『野獣』になるのは酷く恥ずかしい。日の光の下に、自分の本性――狼の姿が曝け出されている。とても嫌な気分だ。相手が単体だったのが幸い、なんとかなっているが……。
嘴を向けて突っ込んでくる鳥キメラを、腕に装着した「鈎爪」で応戦する。勢いよく突き出した右手が相手の翼を掠り、羽が舞い散る。
「予告もなしにキメラが現れるということは、本当に、ただの暴走劇みたいだな。柳澤の奴、処理に間に合うのかよ。真昼間だぜ？！」
バサバサバサッ！　鳥が向きを変え、別の角度から魁を襲う。
ゴオォッ！　嘴から火の玉が吐き出され、魁は慌てて後ろに仰け

反る。
「能力だけは一丁前か！」
左手で大きく炎を振り払う。じりじりっと、毛の一部が焼け焦げる。ブレスを終え、隙が出来た胴体に、右手の鈎爪をどすんと食い込ませる。内側に曲がった爪は、内臓を掻き出し、血液が激しく噴射する。
もがき、奇声を発っするキメラ。
魁は躊躇(ちゅうちょ)せず、一気に爪を抜く。生暖かいシャワーが、魁に降りかかり、狼の顔に赤い斑(まだら)ができる。
鳥はそれでも尚、バッサバッサと羽をバタつかせ、頭を左右に揺らし、必死に魁に攻撃しようとしている。目は血走り、視界は定まらず、なのに、敵はそこにいると、本能でわかっているかのようだ。
『野獣』となり、戦うにはそれなりの精神力が要る。常に「人間の心」と「獣としての本性」との間で、均衡を保たなければならない。通常ありえないこの殺伐とした戦いの中では、「人間の心」を重視していては、己の命を守ることが出来ない。しかし、もう一方の「獣の本性」に偏れば、目の前のこの鳥キメラのように、人間であったことを忘れ、ただひたすらに攻撃を続けることになる。
魁も、度々、そういう状態に陥るから、よくわかる。澪が彼をなだめなければ、きっとこの鳥と同じ目に遭うはずだ。もう、二度と人間に戻れない、ただの怪物に……。
ブルブルッ。考えるだけでもおぞましい。
（目の前の敵に集中するんだ）
魁は助走をつけて、鳥の上へとジャンプした。背後へ回ると、翼の付け根に爪を食い込ませ、噛み付く。鳥は魁を振りほどこうと抵抗するが、しっかりと引っ付き、離れない。
ボキボキと鈍い音がする。左翼は付け根から裂け、骨が砕けていく。
羽毛が口の中に入ろうが、お構いなしに、魁は何度も鳥の背中を喰いちぎった。腹を空かせた狼が獲物を捕まえるように、耐え切れ

ずうつ伏した鳥の背に上乗りになって、羽を掻き毟り、肉を裂く。
ギャーギャー大声でのた打ち回っていたそれも、終に心音が途絶える。
「し……死んだか……」
体中を鮮血で濡らした魁は、自分の高鳴る心臓を鷲掴みにして、自我を保とうとしていた。ふらふらと立ち上がり、天を仰ぎ見た。
まだ、お昼前。丁度小腹が空いてきたこの時間に、『野獣』になるのはキツイ。まかり間違えば、このままこのキメラの肉を全て食い尽くしてしまいそうだ。
(澪に、「肉は食うな」って言われたばっかりなのに……。もう少しで我を失うところだった……)
荒い息と、頭まで鳴り響く心臓の音。
目の前に広がる、赤い海。
「せっかく買い物しようと思ったのに、台無しだぜ……。また別の日に改めて来るか……」
息耐えた鳥に、ペッと唾を吐き捨てる。
と、

トゥルルルル……

柳澤からの連絡だ。腰の携帯電話ホルダーから本体を取り出し、電話に出る。
「遅すぎ！　――はいはい、魁だけど？」
『魁、そっちにキメラが行かなかったか？　大峰教授の失敗作が』
「来たよ。いまさっき。倒したから、処理してくれよ。場所は……」
『そんなもんは携帯のＧＰＳでわかる。……「野獣」になっているのか？　一般人には見られなかったか？』
「知らねぇよ！　こちとら自分の命を守るだけで精一杯なんだ。人通りの少ないところだったけど、何人か目撃してたかもなぁ。第一、あの鳥、声がデカいんだよ」

『フン。言い訳など聞かぬ。記憶処理……必要か……。通行人が特定できるのか……？　まぁいい、なんとかする』
「頼むよ。幾らビルの屋上ったって、昼間じゃ人目に付きやすいだろ。何とかしてくれ」
『早急に処理する。……正確には、もう、そっちに向かっている』
「了解。――あ、ついでにさ。昼飯(おご)奢ってよ。腹減った」
『致し方なかろう。待ってろ』
電話が切れると、ニヤッと不敵に笑う。
あの、柳澤に昼飯代を出してもらえるなら、うまいもんが食えそうだ。腹を空かせた狼はぺろりと舌なめずりをした。
「人間の姿に戻っておかないとな……」
携帯をしまい、屋上の隅から、街を見下ろす。よれよれの壊れかけたフェンスに寄りかかり、柳澤の車が来るであろう方向を見つめる。向かっているとは言っても、今回は不測の事態。そう、すぐに到着できるものでもないだろう。
気を集中させ、目を閉じて、顔を空に向ける。体中の毛がざわめき立ち、少しずつ短くなって、人間の肌が見えてくる。狼の荒々しい骨格も徐々に人間らしく、鼻が縮み、避けていた口も小さく、顔から毛が引き……。そして薄っすらと目を開け、自分の身体が人間に戻っていくのを確かめようとした瞬間。

――ドンッ！

背後から鉄砲玉のように、勢いをつけて何かが押した。魁はバランスを崩し、フェンスにぶち当たる。が、その壊れかけたフェンスは、勢いよく外れ、魁とともに宙に放り投げだされた。
鳥だ。あの鳥が、死んだと思っていた鳥キメラが、最後の力を振り絞って、魁に体当たりしたのだ。
まっ逆さまになりながら、魁の目はその姿を捉えていた。
半分人間に戻りかけた鳥男が、宙ぶらりんになった左腕を押さえ、

自分を見下ろしているのを。そして、そのまま後ろに倒れこんだのを。

――死ぬッ？！

地上がどんどん迫ってくる。

とっさに受身を取り、――だが、ドシンと、背中をアスファルトに強打する。

激痛が走る……、まだ、生きている。

（『野獣』でなかったら、死んでいたか……？）

身体が動かない。何かに掴まろうと伸ばした腕は、まだ半分毛むくじゃらだった。

（しまった……。変化の途中……。気を張らないと、また『野獣』に逆戻りだ……）

幸い、落ちたのは裏通り。三、四メートル幅の道路の路肩にごちゃごちゃに詰まれたビールケースや、空きダンボール、壁に寄りかかった数台の自転車が見える。大通りからは少し離れているが、かといって、油断していては誰かに見つかってしまう。

懸命に身体を起こそうとする。……力が入らない。

（せめて……、この姿だけでも何とかしないと……）

動くのをやめ、ただ、自分の姿を戻すことだけに集中する。徐々に、徐々に、人間「魁」の姿へと戻っていく。

――人の気配。

魁は恐る恐る、顔を持ち上げた。

自分の視界の先に、一緒に落ちてきたフェンスが見える。

そして、そのフェンスの手前で、魁の姿に、両手で顔を覆う、見知らぬ女性の姿。

（見られていた……！）

だが、どうすることも出来ない。

魁の顔には、狼の部分が残っていた。耳や、牙はまだそのまま。

（終わった……！）

全身から一気に血の気が引いていった。

# 第3話

飲み屋や個人商店が入った雑居ビルの連なる商店街の裏通りに、柳澤教授の車が付いた付いたときには、その場に魁の姿はなかった。

戦闘が行われたビルの屋上には、「大峰教授の失敗作」だけが倒れていた。

「……あの馬鹿。飯を奢(おご)ってやるといったのに」

柳澤は少しつまらなさそうに溜め息を吐いた。

年恰好から言って、三十代後半か、四十代前半か。半袖ワイシャツに黒いスラックス、眼鏡を掛け、髪を七三に分けた典型的な科学者「柳澤圭司」は、腕組みをして、この殺伐とした事件現場を見渡していた。

「魁の奴、いつもは人目につかないように、もっと高いビルの上で戦闘するはずなのに……。余程切羽詰まっていたのか」

柳澤に同行した、四人のスタッフが、特殊な掃除用具片手に、血液の跡を消していく。魁が倒した鳥キメラの男の死体も、白い布でぐるぐる巻きになり、運び出される。

「狭い屋上をいっぱいに使って戦った、と言うわけか。客に中継できず、残念だな。さぞかし面白い戦闘だったろうに」

キメラの倒れていた場所に立った柳澤は、ふと、すぐ側にあるフェンスに気付いた。一箇所だけ、外れている。振り返ると、その場所まで点々と血痕が続いており、キメラが出血した後に自力でこの場所まで歩いてきたことが窺える。

「……魁が倒した敵の動きにしては、妙だな」

止めを刺したと思われる、大量の血痕があった場所からここまで、数メートル離れている。

「油断したな……？」

柳澤はぎりりと歯を鳴らした。

スタッフの一人が、「路地に、こんなものが」と彼に渡したのは、

魁の携帯電話だった。裏通りに落下したフェンスの側に落ちていたらしい。
状況から察するに、魁はあの失敗作に、ビルの屋上から突き落とされたと見るのが自然だった。四階建てのビル、普通の人間であれば即死だが、魁に限って、そんなことはありえないだろう。
柳澤はますます不機嫌になり、魁の携帯をがっちりと握り締めた。

その頃、魁は豪華なマンションの一室で、借りてきた猫のようにソファーの上でちょこんと縮こまっていた。シンプルなセンスのいいインテリアと家具、清楚な香り。いつもの六畳一間のボロアパートとは別世界。キョロキョロと不自然にあちこち見回し、肩を竦ませる。
「本当に、お医者さんに行かなくて大丈夫なの……？」
この部屋の持ち主、医大生の和泉が彼にそう話しかけても、魁は半分上の空だった。
「服は大丈夫だった？　サイズとか……。趣味合わなかったら、ごめんね」
「あ。う、……うん、大丈夫。ありがとう。わざわざ買って来てくれて……」
その部屋に住むに相応しい、清潔感に溢れ、上品で、美しい女性。澪とは正反対の彼女に心配され、魁は照れくさそうに笑った。
「どうして……どうして、俺を助けたんだ……？　真昼間の狼男なんて、普通に考えたらありえないだろ？」
二人がけソファーの隣に座った和泉に、魁は恐る恐る尋ねた。
彼女は長いストレートの黒髪をサラッと揺らし、魁を見つめて、こう答える。
「人を助けるのに、理由なんて要らないよ？」
「だとしたって、ここまで……」
魁は言葉を詰まらせた。
和泉は、医大から自宅マンションへ帰り道に、魁が落ちてくるの

を目撃した。大きな音とともに、屋上から落下した魁を放っては置けなかった。まだ息があり、必死に生きようとしていたからだ。
頑(かたく)なに医者を拒否するが、明らかに血まみれで、あちこち引っかかれたような傷がある。触診し、骨折がないことを確かめてから、彼を立たせた。服に大量の血痕がついていたが、彼自身にそれ程の出血した跡は見当たらない。
何よりも彼の風貌は、変わっていた。完全に落ち着くまで、犬のような耳が元に戻らず、彼女は自分のハンカチを被せて、二ブロック先のマンションまで肩を貸して歩いた。
部屋に着くと、彼女は魁にシャワーを貸し、その間に彼が行くはずだった古着屋から、適当に服を見繕い、お昼と称してパスタをご馳走した。
魁は『野獣』になってから、これほどまで他人に優しくされたことはない。闇に染められた現実の中に、パッと、光が灯ったような心境だった。
「そりゃね、最初はドキッとしたよ？　自殺かと思った。でも、様子がおかしいし、……あの、獣みたいな顔が元に戻るまでは、本当は、怖くて仕方なかったけど……。でも、思い切って助けて、よかったかな。見殺しにしてたら、私は自分自身が嫌いになっちゃうもの」
微笑む和泉に、魁は決まり悪そうに言い返す。
「助けてくれたのは、感謝する。本当にありがとう。……でも、これ以上俺とは関わらないほうがいい。むしろ、忘れてくれないかな。君と俺とでは、住んでいる世界が違い過ぎるんだよ」
「何？　それ？　違うってどういうこと？」
思いもよらない魁の台詞に、和泉は怪訝(けげん)そうに首を傾(かし)げた。
申し訳なく思い、一つずつ言葉を選びながら、魁は答える。
「世の中には、知らないほうがいいことだってある。医大に通ってるって、……言ってたよな？　そんな将来のある奴が、俺に関わっちゃ駄目なんだ」

「それでも」
和泉は傾げたまま、にっこりと笑った。
「私は、引く気はないわよ？　見ちゃったんだもの。そして、何か秘密を抱えている、あなたのことが気になってしまった。……駄目？」
魁はぎくりとして肩を竦ませた。
屈託のない笑顔で見つめる和泉に、返す言葉が見つからなかった。

「入るぞ！」
ボロアパートの鍵のない扉がバタンと勢いよく開く。
「魁はどこだ？！」
柳澤だった。
暑さのあまり、下着でごろごろしていた澪は、キャーと叫びながら、慌てて側にあった魁のエロ本を投げつけた。バサリ、と、柳澤の眼鏡に本が当たって畳に落ちた。
「魁は買い物中だよ！　まだ帰ってない！　女の子のいる部屋に来るときはノックくらいしなさいよ、このエロオヤジ！」
カタカタと音を立てる扇風機で身を隠しながら（実際は全く隠れていないのだが）、澪は柳澤にあかんべをする。
「お前のような子供の裸を見たところで、私が興奮するはずがなかろう、くだらない。……そうか、まだ帰っていないのか……。すると、外部の者と……」
ブツブツとなにやら呟き、顎を擦りながら思案する柳澤。澪は嫌な予感がして、聞き返した。
「魁に、何かあったの？」
柳澤は澪の側に屈むと、ズボンのポケットから、四角いものを取り出して彼女に突きつけた。
ワインレッドの、ストラップのない、携帯電話。魁のものだ。
「え？　どうして柳澤が持ってるの？！」
扇風機の前から這い出て、携帯電話を受け取る。よく見ると、全

体に打ち付けられたような傷がついている。
「道路に落ちていた。さっきまで、ちょっとした戦闘状態だった。魁は携帯を落としたことに気付かず、そのまま消えてしまった。ここに戻っていると思ったんだが」
「昼間から敵が出たの？」
「他の研究所の失敗作がな、暴走したんだ。魁はそれを倒して、私が処理に向かうのを待っていたはずなんだが……、どこにも……」
電源の入らない携帯を、澪は切なそうに見つめた。柳澤の話は、半分しか聞こえていなかった。
魁のことを考えれば考えるほど、澪の胸の鼓動が高鳴り、息苦しくなった。
（こんなことは、今までなかったのに……）
偶に自身の暴走が止められなくなる、魁。戦闘状態に入っていた、ということは、『野獣』に姿を変えていたということ、そのまま、我を見失ったんじゃ……。
「お前の心配するような事態は起きていない。安心しろ」
察したのか、柳澤は澪にそう言った。よかった、と、澪は胸を撫で下ろす。
「もし、魁が戻ってきたら、少し警戒したほうがいい。いつもと違うことがあれば、私に報告しろ。それと、魁の新しい携帯だ」
壊れた携帯と同じ型の、真新しいそれを受け取る。
「また木曜の午後に来る。そういう約束だからな」
言い残すと、柳澤はそのままの勢いで、部屋からいなくなった。
半開きのドアが、外の生ぬるい風を運んでくる。ジージーと泣き喚く油蝉の音と、電車の走る音が、近くに聞こえる。
涼ませる相手を失った年代物の扇風機の風が、部屋の隅に置かれた、「やなぎさわ行き」のビニル袋をゆらして、カサカサと音を立てさせていた。

# 第4話

柳澤の言うとおり、帰ってきた魁は、いつもと様子が違っていた。ぽやっと、何かを考えているようで、何を話しても、まともに返事が返ってこない。かなりの重症だ。

「魁の服のセンスがいつもと違う」

「柳澤が、探してたよ？」

「着ていった服は、どうしたの？」

窓に肘を掛け、立ち膝で、遠くを見つめる魁を見て、澪は苛々(いらいら)する。

（なんなの、おかしいよ、魁！）

いつも無駄に絡んでくる魁が、相手をしてくれない。つまらない。

（あれ……、もしかして……）嫌な予感。

まるで魁は、恋煩(わずら)いをしている、乙女のよう。

（女が出来たんじゃ……）

魁は次の日から、頻繁に家を空けるようになった。行き先を言わずに、ちょっとセンスのよさげな服を着て出て行くあたり、明らかに向かう先は女のところだ、と、澪は直感した。

約束の木曜の午後に、柳澤が訪れたときも、魁は留守だった。

「なるほど。私も、澪と同感だ。……女か」

この件に関しては、珍しく柳澤と意見が合った。

「でしょ？　おかしすぎるもん。今まであいつ、こんなことなかったのにさ。いきなりだよ？」

卓袱台(ちゃぶだい)を囲って、温くなりかけた麦茶を飲みながら、二人は魁について詮索を始めた。偶に空回りするポンコツ扇風機も、首を左右に振りながら談義に混ざる。

「だから言っただろう、おまえの、その子供の身体じゃ、魅力に欠けるって」

「どぉしてそこに辿りつくわけ?！　第一、私は十九！　大人なの！　出てるところ出てるでしょうが！」
「いやいや、くびれが足らん」
「くびれ?！　ありますよ、ほら！　（と、澪はTシャツをめくる）確認して！　エロオヤジ！」
「……そういうところが子供なんだよ。（ムッとして眉間に皺を寄せる柳澤）魁は、お前を遥かに凌ぐ大人の魅力溢れる女性にでも出会ったんじゃないのか?」
　ぐびぐびと麦茶を飲み干し、だんと卓袱台に置くと、柳澤は澪にこんな提案をしてきた。
「……どうだ、覗いてみるか?」
　柳澤のオヤジ顔が、にんまりと澪の前に迫った。
　澪は少し躊躇したが、やはり、魁のことが気に掛かり、うずうずが止まらない。
「う……うん」
「やなぎさわ行き」のビニル袋を持って、澪は彼の乗ってきた黒いワゴンに乗り込んだ。
　運転手と作業員が一人ずつ、車で待機していた。『野獣』たちに何かあったときのために、常に柳澤と行動をしている男たちだ。
「魁の携帯のＧＰＳ情報を見れは、居場所は特定できる」
　柳澤は後部座席に澪と二人で座り、膝の上にノートパソコンを広げて作業を開始した。ディスプレイに、周辺地図が写り、現在地マークと赤い点が現れる。
「案外近くなんだな?　チャリで行ける範囲か」
　交通手段が自転車しかない魁。これなら毎日でも行ける距離だ、と、二人は頷いた。
「いつも行く古着屋はここだよ！」
「この間キメラに襲われたビルはここだ」
　互いに指差した場所は、驚くほど近かった。自宅から、鳥キメラに襲われたビル、古着屋、魁のいる女の場所が、直線で結べる。

「なるほど、つまり、だ。あの事件のときに、女に出会ったんだな」
柳澤の言葉に、澪はこくりと頷いた。

車は和泉のマンションの近くのコインパーキングで、そこから魁が出てくるのを待った。
商店街の裏に立てられた十階建ての新築マンション。真っ白い壁に、夕日が当たり、少しオレンジ色に見える。出入りする、綺麗な格好をしたＯＬや上品な主婦、頭のよさそうな学生、サラリーマン。高架下のボロアパートにはない光景だ。
午後七時を回り、日がすっかり落ちて辺りが暗くなり始めた頃、マンションから魁が出てきた。
にやにやと嬉しそうに肩を寄せ合って女と歩いている。
髪の長い、清楚な女性。優しそうで、賢そうで、……綺麗だ。
「あの女か……。澪に勝ち目はないな」
車の窓を開け、様子を見ていた柳澤は、一緒の窓から身を乗り出して女を確認している澪に、思わずそう呟いた。
「……魁の、馬鹿ッ！」
身体を引っ込めると、澪は座席にうつ伏して丸くなった。
怒りとも悲しみとも似つかない、苦しい気持ち。ざわざわっと、身の毛がよだち、涙が込み上げる。
澪は持っていた「やなぎさわ行き」のビニル袋を、ぐっとおなかに抱え、肩を震わせた。
知りたかったけど、見たくなかった。とても嫌な光景。今まで自分だけの男だと思っていた魁が、知らない女と仲良く歩いている。それが、許し難かった。まるで、魁が、知らない世界に行ってしまったかのような、そんな錯覚に囚われる。
「目に見えていたものだけが真実じゃない。魁がお前以外の女に手を出すことだって、ありえることだ。……だが、決して、いい状態とは言えないな……」
眼鏡の位置を片手で直し、柳澤は、人目憚（はばか）らず女と別れ際のキス

をする魁に、冷たい視線を向けた。

鼻歌を歌いながら、魁は家路に着いた。

和泉との時間は長いようで短い。彼女が大学に通う時間の隙間を縫って会うのが、また、刺激的。間男の気分だ。

清楚だが、情熱的で、はっきりしていて。和泉はまさに、魁の理想のタイプの女性だ。まるで自分とそういう関係になるためにあの場に現れたとしか考えられない。

澪と一つしか違わないのに、どうしてこんなにも大人びていて、艶(なまめ)かしいのだろう。柔らかい唇、優しい香り、ふわりと揺れる長い髪。回数を重ねるたびに、彼女の好きな部分が一つずつ増えていく。

楽しくて、嬉しくて、仕方がない。二人だけの、秘密の関係。

自分の正体さえ知られなければ、きっと、うまくやっていける。

マンションからの帰り道、日が沈み、少しずつネオンの灯りが街を彩り始める。ただでさえテンションの高い魁を後押しするかのような、街のざわめき。夜の街へと姿を変えていく商店街。夜風が魁の肌を撫で、髪を戦(そよ)がせ、いい気分にしてくれる。

錆付き、がたがたと音のするボロアパートの階段を上がる。何事も無かったかのように玄関を開け、明かりを点ける。靴を脱ぎ、顔を上げ……。

そんな魁を迎えたのは、色褪(あ)せた畳の上で正座する澪だった。そこからは嫌な空気がこれでもかと漂っていた。

「おかえり、魁。素敵なお姉さんと、素敵な時間、楽しかったでしょうね」

薄暗い部屋、明かりも扇風機も点けずに出迎えたところを見ると、和泉との時間があまりに楽しくうきうきしていた魁も、流石に意気消沈した。

覚悟を決めて澪の目の前に正座する。

「大変、ご心配をお掛けして、申し訳ない」

もう、どう言ったらいいのかさっぱりわからない。なんて修羅場

なんだ。魁の身体から汗がだらだらと噴き出てきた。頬をつぅと伝い、顎から零れ落ちる。肩を竦ませ、チラッと顔を上げて澪を見る。
凍りついた顔。見下した目。
「何が申し訳ないの？　いいのよ。どうせ私は、魁にとって、たったそれだけの存在だったって、そういうことなんでしょ？　偶々『野獣』になって、一緒に暮らしている。男と女だったから、そういう関係になって……。でも、もう、用済みみたいね、私」
「な、何もそこまで……」
答えた口が引きつっていた。
正直、魁の中では、澪はただの同居人になりつつあったのだ。それが、澪に伝わってしまったことが、心苦しい。
「あのさ。魁が元のままの『人間』だったら、人を好きになるのは自由だ、私は身を引くしかない、と思うかもしれない。でもさ、違うよね？　魁は自分が何だか、ちゃんとわかってる？　彼女は知ってるの？」
……痛いところを突かれた。
和泉は、彼が獣になる性質がある、ということしか知らない。魁はその理由を、まだ和泉に話せていない。――話せるわけもないが……。
「何も知らない『人間』を、わざわざこっちの世界に引き込むようなことをしちゃ、駄目だよ。どう考えたって、住む場所も、世界も違う人じゃない」
「う……うん……」
澪の言うとおりだ。魁も、そう思って、一度は躊躇したはずだったことを、ふと思い出した。
「よく考えてよ。『人間』と『野獣』は、相容れないもんだよ？　どちらも傷つくことは、目に見えてるじゃない」
言葉が震えている。澪は、大粒の涙を流しながら、必死に魁に訴え続けた。
「誰も傷つかない結末なんて、ありえないんだよ？　誰かがどこか

で苦しむことになる。私は、魁がそうなるのが、耐えられない……」
澪がどうして和泉のことを知っていたのか、なんて、そんな単純な疑問さえ持てないくらい、魁は動揺していた。この数日、和泉との甘い時間が彼の大部分を占めていて、自分が『野獣』であることすら、忘れかけていた。
（もう、夢から覚めなきゃいけない時間なのか……？）
自分の中で次第に大きくなっていく和泉に対する気持ちが、嫌だ嫌だと暴れている。
（苦しい。何故、こんなにも苦しいんだ……）
項垂(うなだ)れる魁に、澪がそっと、手を差し伸べる。いつものように、優しく頭を胸に寄せ、柔らかな感触が、魁の頬に触れる。ゆっくりと頭を撫ぜる澪の手が、彼の髪の毛を梳(す)く度に、彼女の想いが痛いほど伝わり、魁は自分の愚かさから涙を流した。

# 第5話

次の日の夜、再び和泉のマンションを訪れた魁は、覚悟を決めて、切り出した。

「やっぱり、君とこれ以上、会うことは出来ないと思う」

そう言った魁の目が、少し泳いでいるのを、和泉は見逃さなかった。

「それって、本心じゃないでしょ？」

冷房のよく効いた部屋。リビングのソファーに腰掛けた魁にアイスティーを渡した和泉は、にこりと微笑んで隣に座った。

「言ったじゃない。私、引く気は無いって。魁のこと、好きになっちゃったんだもの。今更、そんなことを言われたって困るわ」

和泉の言うことも一理ある。忘れてしまうには、少し、時間が経ち過ぎた気がする。ほんの、一週間足らずの期間が、一年も二年もあったかのような。濃密で、甘い、愛くるしい時間が、彼らを支配していた。

「俺、人間じゃないんだよ、もう。俺と一緒にいたら、きっと巻き込まれるよ？」

改めて言うのも、恥ずかしい。「人間じゃないんだ」なんて、まともな人間の吐く台詞じゃない。

「――『狼男』って、こと？」

「あ……うん、まあ、正確には違うけど、そんなところだよ……」

魁はアイスティーを啜って、大きく溜め息を吐いた。

彼女との出会いを、思い出す。元に戻り損ねた『野獣』が、『人間の女』に助けられるなんて、かっこ悪すぎた。彼女に、どうしたら自分のことを忘れてもらえるのか、そう思ってマンションを訪れていたはずが、いつの間にか、「そういう関係」になっていた。

肌を重ねるたびに罪悪感が、背徳感が、魁を襲った。興奮しすぎれば『野獣』の姿になってしまうため、彼女に知られないように、

ぐっと本性をしまいこんだ。
それでも、彼女に会いたくて、関係を続けたくて……。
澪に指摘されるまで、和泉との仲が、二人にとって、決していいものではないということすら思わなくなっていた。このまま、自分のことを隠してでも、彼女との関係を続けたいという、単純な考えで動いていた。
（――もう、それも終わりにしよう。澪の言う通りなんだ。俺は、彼女とこれ以上いたらいけない男なんだ）
決意に握り締めたはずの両手が、少し迷いがあるのか、小刻みに震えた。
「私が医学を齧（かじ）っているから言うことじゃないけどね、それって、ありえない存在だと思うわ。『狼男』って、元々伝奇かなにかでしょ？　『人狼症』ってものも世の中にはあるらしいけど、それはあくまで『人間が獣に変化できる』と信じすぎたことによる精神病であって、実際人間が『狼』に変身するなんてことはないのよ」
魁の気持ちをどう受け止めたのか、論理的に返してくる和泉。
彼女のそういう思考は自分には無く、結構好きだ。でも、だからと言って、このまま彼女のペースでずるずると関係を続けてはいけないと、自分に言い聞かせた。
「和泉、君は俺の耳や牙を見て、それでもその存在を否定するのか？」
その言葉は和泉だけではなく、魁自身にも突き刺さった。
「それは……」言葉を濁す和泉。
「本に書いてあること、テレビや新聞が語っていることだけが、世の中の真理じゃない。そこに現れない存在、見えないところで動いているモノだって、ある。俺はその中の一つなんだ。いわゆる『闇の世界の住人』て奴。……わかる？」
思い切って、彼女を突き放そうと、魁は強がった。彼の力強い眼差しに、和泉は少し、たじろいでいるように見えた。
「わからないわ……。魁、あなた、何が言いたいの？」

まだまだ、和泉は諦めない。
「科学技術、医療技術がいいことだけに使われているなら、戦争は起きない。人間て、残酷なんだ。誰かを殺すための道具を、平気で作り出す。その武器同士で戦いを始める。……俺は、その『武器』なんだ。今まで数え切れないくらい、人を殺した。いや、アレが人だったなんて、思えなかった。ただ、目の前にいる、『標的』。だから、相手が死んでも、可哀想なんて思ったことは無い……」
血がざわめき立つ。興奮状態に入ってきた。
つんつんした髪の毛が、更に逆立っているような気がする。目にも、いつも以上に力が入って、そんなつもりは無いのに、彼女を睨みつけている。
「俺はもう、随分前から『人間じゃない』。人間として生きる権利は当の昔に失った。君と出会ったからと言って、それは変わるもんじゃない」
和泉は首を左右に振り、困惑した表情で魁を見ている。
魁の中で、少しずつ、理性が壊れていく。
「真っ黒に染まったものを、白く塗り替える手段はあるのか？　それほど強烈な光を、君は持っているのか？」
（違う……、俺の言いたいのは、そんなことじゃない）
心の中で頭を抱える魁。
ぞわぞわっと、全身の毛が立つ感覚。
「黒くなってから、元に戻りたいなんて、考えた俺が愚かだった。和泉との関係で、俺は救われていると勘違いしていた」
牙が現れ始める。
背中から、少しずつ、毛深くなってきた。
「ヤバイ……、少し興奮した……。このままでは、俺は君を食い尽くしてしまう……」
額を押さえ、ふらふらと立ち上がる。
和泉は慌てて、彼の身体を押さえようと手を差し伸べた。
「触るな！　本当に、抑えられないんだ……！」

びくっと、手を引っ込める。和泉はオロオロと、魁から後ずさりした。
ぐらっと、揺れる身体を、必死に押さえ、魁は壁伝いに玄関へと歩く。
「隠し事が多いのは、申し訳ないと思ってる。でも、言えないことだってあるんだ……。察してくれ……」
別れを惜しむように、寂しそうな瞳で彼女に振り返ると、半分獣になった魁は、そういい残して部屋を去った。

『言えないことだってあるんだ……。察してくれ……』
イヤホンから漏れる魁の声。
「まあ、魁にしては頑張った方か……」
柳澤はにやりと不敵な笑みを浮かべた。
和泉のマンション前の、前日に二人の関係を目撃したパーキングで、柳澤は部下とともに魁を見張っていたのだった。魁の携帯に仕掛けられた盗聴器から、魁と和泉の会話を盗み聞きしていた柳澤は、安心したのか、ふうと大きく溜め息を吐いた。
「しかし、この、『和泉』という女、興味深いな……。調べてみる価値は、アリか……」
眼鏡をくいと直して、膝の上のノートパソコンを見る。
部屋を出たはずの魁の位置が、動いていない。
「あいつ、また……」
どうやら携帯電話を和泉の部屋に落としていったらしい……。幾ら興奮していたとはいえ、魁はこういうことには全く無頓着すぎる。
「いや、でも……。これは、使えるな……」
顎を擦り、にやにやとマンションの和泉の部屋を見つめる。ベランダから、目を晴らした和泉が、焦燥しきった顔で夜風に当たっているのが見えた。
「別れてきたよ……」

そう言ってアパートに帰ってきた魁。
魂が抜けた殻のように、空っぽの頭。最悪の別れ方だ。出会いも、そんなにいいものじゃなかったが。野獣から戻りかけていたところで出会い、野獣になりかけて別れた、なんて、お笑い種(ぐさ)だ。
ごろんと、畳に大の字で転がる。
澪は、そんな魁の頭を、優しく撫ぜてくれる。枕元にちょこんと座り、何度も何度も、子供をあやすように。澪の優しさが、痛かった。傷付いた魁の心に、ずきずきと染みた。
切れかけた蛍光灯の光は、そのときの魁には、丁度いいくらい、薄暗かった。電車の振動で、ゆらゆらと揺れるのも、まあ、悪くない。貧乏くさい、昭和時代のボロアパートが、自分に合ってる。
背伸びなんか、するんじゃなかった。
キレイなマンション、美しい恋人。そんなのはただの夢だったんだ。
魁は何度も何度も、自分に言い聞かせた。

# 第6話

部屋の片隅に、ワインレッドの真新しい携帯電話が落ちている。とっさに、「魁の物だ」とわかったが、和泉に届けに行く勇気はなかった。……とは言っても、元々、彼がどこに住んでいるのか、どんな暮らしをしているのかさえ、知らないのだが。

魁の台詞、その意味が、全くわからなかったわけじゃない。

なんとなく、彼が危険な存在だと感づいていても、止められなかった、感情。放っておけない、傍(そば)にいたい、という想いが、強くなってしまっていた。

魁が別れを切り出すのは、いつか来る現実だというのも、和泉にはわかっていた。それでもその時になると、「信じられない」と、思わず心にも無い言葉で彼を引き止めてしまう。

ただ素直に、「好きだから、そんなの関係ないよ。大丈夫」って、簡単な台詞が、喉に痞(つか)えて出てこない。悔しい、恨めしい。自分の知らない世界で苦しんでいる魁を、どうにも出来ない自分が、ふがいない。

魁が狼男だって、なんだって、本当はどうでもいい。なのに、『人狼症』なんて言葉を思い出して……。目の前にいる、魁の言葉を、ただ信じることが、どうして出来なかったのだろう。

何とかして連絡を取ったほうがいいだろうと開いた魁の二つ折りの携帯には、一件のメモリも無い。着信、発信履歴で、特定の二人とだけ通話するだけの携帯だ、ということがわかる。最新機種なのに、写メを撮った形跡も無い。メルアドも、ましてや、Ｗｅｂを見ている形跡も、何も。

年齢の割りに、随分アナログな暮らしをしているようだ。

二十五歳って言ってた。彼のことでわかるのは、行きつけの古着屋と、年齢だけ。

（私は、どんなに強がったって、魁のことを、何にも知らない……）

その夜は魁の携帯を枕元に置いて寝た。少しでも、魁の温もりが欲しかった。
目を瞑ると、自分の力を必死に抑えている、魁の姿が浮かぶ。
『人間じゃないんだ』
彼の台詞の本当の意味は？　そんな存在が、本当にありえるのか？
胸の奥で、もやもやと、疑問が燻った。
人間と獣の間、姿を変え、普段は人間として暮らしている。そんな、怪奇小説の産物が、現代社会に紛れて……。
どんなに考えても、解決しない。
魁のことを考えるだけで、苦しくなる。最後の、あの後姿を思い出すと、涙が込み上げてくる。
「私は、非力ね……」
携帯を見つめ、そう言うと、和泉は枕元の灯りを消した。

土曜日の大学の食堂は、がらんとして、過ごしやすい。和泉は図書館から何冊もの分厚い本を持ち込み、学食で買ったサンドイッチを咥え、難しい顔で片肘を付いている。
学食のメニューはなかなか豊富で、よく利用している。味もいいし、何より安い。仕送りだけで暮らしている和泉にとって、なくてはならない場所だ。
白い長テーブルに、平日なら同じ講義を受ける友達数人で掛け、わいわいと取り留めない話をしているところだが、今日は土曜日とあって来ている友人はいないようだ。そのお陰で、和泉は落ち着いて、調べごとが出来る。
『狼』『人狼』……、少しでも、魁のことを知りたいと、検索していた。本当に知りたい情報なんて、案外載っていないものだ。当然のように、「存在しない」「狼と思い込んで……」と記述してある。和泉の知っていたように、「精神病の一種」という記述も。「狂犬病の症例を例えて……」だが、魁に当てはまるものは、何一つないのだ。

コーヒーとサンドイッチが、交互に口に運ばれる。時間が経つばかりで、新しいことは何一つわからない。
「本だけじゃ、限界があるのかな……」
食事を終え、一息吐くと、座ったままぐんと背伸びをする。と、見慣れない人影。
「橘（たちばな）……和泉君？　かな？　そんなに疲れた顔で、一体何を調べてるんだい？」
四十代くらいの、眼鏡の男が、和泉に声を掛けた。
「は、はい？」
和泉は慌てて両手を下ろし、彼に向き直った。
ひょろっと痩せて、頬のこけた、薄気味悪い男だ。今時七三に髪を分け、特徴のない半袖ワイシャツにスラックス。目だけがぎらぎらと光っている。
「あの、私に、何の御用です？　あなたは？」
不審な男に、警戒する。
「あなたのお父さんのね、知り合いですよ。橘病院のお嬢さん。それに、ここは私の母校だしね」
男は不気味に笑いながら、和泉の隣に座った。
和泉は嫌な予感がして、そっと椅子を反対方向にずらした。
「で？　御用は？」
恐る恐る上目遣いに尋ねてみる。
出来れば、すぐにでも立ち去りたい気分で一杯だ。
「ウチの魁が、随分お世話になったみたいだからね、ちょっとご挨拶に」
「か……魁を知ってるの？！」
今まさに、魁の情報が欲しかった和泉にとっては、思いもよらぬ回答だった。一瞬のうちに、この気味悪い男が、救世主にさえ見えてきた。
「魁はウチの稼ぎ頭なんでね」
にんまりと笑う男。笑い顔が似合わない、というのは、こういう

のを言うのだろう。
「あ、言い遅れた。私は……、こういう者です。もしよろしかったら、少しお話でもいかがです？」
すっと名刺を差し出す。「柳澤生体研究所　所長・柳澤圭司」と書いてある。
「生体……研究所……？　何の研究をしてるんですか？」
思わず、訊いてしまった。
何だか、魁の秘密と、繋がっているような気がした。
「まあ、ここでは何ですから……、場所を変えましょう」
和泉は柳澤に促されるがまま、食堂を出た。

「携帯電話がない！」と魁が騒ぎ始めたのは、和泉の部屋を『半野獣状態』で出た次の日の昼だった。頭からすっかり携帯のことが抜けていたのだが、ふと、思い出した。
柳澤と澪との連絡手段がそれしかないため、いざなくなってしまうと、困りモノだ。何よりも、携帯をなくしたことで、柳澤に叩かれるのが嫌だ。
以前鳥キメラに襲われたときに携帯を落としてしまい、柳澤が家まで届けていた、ということを今日になって澪に知らされた魁は、ますます焦った。あの時は言い訳も出来ただろうが、今回は本当にまずい。どこでなくしたのか、さっぱり思い当たらない。
普段はベルトに括りつけた皮製の携帯ホルダーに入れておくのだが、興奮状態になると、自分に責任がもてないため、どこでなくしたのか記憶にないのだ。昨日のことを、頭の中で整理してみる。特に、携帯を触った覚えがない……。が、もしかしたら……。
「和泉の部屋、かなぁ……」
澪の前で呟いてしまった。冷たい視線に、汗が滝のように流れた。
「そんなに気になるんなら、行けばいいじゃない」
澪は、魁がかっこ悪そうに目をうろうろさせてるのを見てからかった。

実際、それしか方法がない。柳澤に言われるくらいなら……、昨日の今日で、とてつもなく行きづらいけど、合鍵も手元にあることだし……、返しがてら……。

「い、行ってみるか……」

がっくりと肩を落とす魁に、澪はにこにこと背伸びして頭を撫でてくる。

「私も行ってあげるよ～。一人じゃ、心細いんでしょ～？」

（それはそれで、嫌だ）

と、言葉にはならなかったが、魁は思った。

# 第7話

和泉の実家は、大きな病院らしい。そこの院長をしている父親が、世の中物騒だからと、セキュリティの整ったマンションに入居させたのだ、と、和泉が話していた。

このマンション、鍵がないとエレベーターにすら乗れない。来訪者は、部屋の中からエレベーターの鍵を開けてもらわないと駄目、という、念の入れっぷり。そこで和泉は、面倒だからと魁に合鍵を持たせていた。それだけ魁を信用していたのだ。

魁は澪と二人で和泉のマンションへと向かっていた。

澪はただただ呆然として、あちこち見回した。魁も、先週和泉と出会ったばかりの頃は、同じ反応だった……、それが、随分前のことのような錯覚。

「黙って来て、悪かったかもな……」

呟いたあとで、実は和泉の携帯番号すら聞いていなかったことを思い出す。

（直接会うことで満たされていたから、携帯番号なんて、気にも留めなかった）

踏ん切りをつけたつもりが、和泉のことを考えるだけで、身体にぽっかり穴が開いてしまった気がする。

一階のエレベーター前のセキュリティパネルで、和泉を呼ぶ。合鍵は持っていたが、今回はお客様として訪れたほうがいいだろうという、魁なりの配慮。……返事がない。

仕方なく、鍵をかざす。エレベーターのドアのロックが解除され、二人で乗る。

（もしかしたら、外出中なのかもな……。部屋の外で、少し待たせてもらうか……）

三〇五号室、彼女の部屋の前だ。ドアの前に張り紙がある。

『和泉は預かった。

彼女は知りすぎた。K・Y・』
小さな白いメモ紙を剥ぎ取り、そこに書かれた文章を、何度も指で辿る。
「な……、なんだよ、これ……？」
ぶるぶると全身が震えだす。何が起きているのか、理解に苦しむ。
「『K・Y・』って、柳澤じゃないの……？　あいつ……！」
澪の言葉に、ますます怒りが止まらない。ぞわぞわと、――これは、『野獣』になる感覚だ。興奮で、変化が始まっている。
「落ち着こう！　魁！　こんなところで、人に見られたら、どうするの？！」
澪ががっちりと、魁の身体を抱きしめる。熱くなりすぎていた魁の心が、少しずつ、冷静さを取り戻す。変化をやめ、元の姿に戻っていく。
「す、すまない……。澪に付いて来てもらってよかった……。俺一人じゃ、何が起こるかわからないところだった……」
「兎も角、柳澤に！　連絡を取ってみようよ！　私は携帯持ってるからさ」
胸を押さえて壁に寄りかかり、深呼吸する魁。
澪は冷静に電話を掛ける。
「――もしもし？　柳澤？　彼女は？！」
『なんだ、もう気付いたのか』
電話口の声は、移動中なのか、少し聞こえにくい。
『大丈夫、何もしていないよ、今のところはね』
「今のところはって……！　どういうことよ？！」
『そんなに大きい声を出さない。どうしても気になるって？　なら、ラボに来ればいい。お前たちの大嫌いなラボにね……ククク……』
ブチッと、澪は思わず電話を切ってしまった。あの笑い方、胸糞悪い。
「なんて言ってた？」
魁は屈み加減で、澪の顔を覗き込んだ。

いつもは動じない澪の呼吸が、心なしか速くなっていた。
「彼女と……、研究所にいるみたいだよ？」
「な、なんだって？！」
「柳澤の奴、彼女に何をするつもりなんだろう……。嫌な予感がする……」
大きく目を見開いて、魁に不安を訴える。
「『今のところは何もしていない』って言ってた。つまり、これから何かする気なんだよ……。早く、助けに行かないと……！」
やらなければならないことはわかっているのに、足が竦(すく)む。
研究所には行きたくない。自分たちが改造され、『野獣』にされた忌々しい場所。『人間であること』を捨てた場所。生き延びるために、柳澤という悪魔の化身に魂を売った場所……。
ぶるぶるっ。頭を震わす。
「行くか……」
意を決して、歩き出した。

和泉は柳澤に案内されるがまま、大学の敷地を出て、近くのパーキングに停まっていた黒いワゴンに乗り込んだ。運転手ともう一人、柳澤の部下のような人物が、車内で待っていた。運転席と助手席に座る二人に会釈し、後部座席へ。柳澤は彼女の隣にゆったりと腰を掛けた。
ただのワゴンじゃない。更に後ろの席には、意味ありげな無数の機材が置いてある。一体、何に使うのか、想像できない。
「君は、魁のこと、どれくらい知っているのかな？」
柳澤は戸惑う和泉に唐突に尋ねた。
「知ってることなんて、殆どありません……」
じろじろと顔を覗く柳澤を避けるように、窓の外に視線を移す。
どうやら、郊外に向かっているらしい。ビルの群れがだんだん遠くなっていく。
「嘘はいけないよ、嘘は。君は彼が『獣になる』ことを、知ってる

んだろう？」
どくっと、大きく胸を打つ。和泉は思わず目を見開いて、柳澤に振り返った。
「図星か……。で？　君はアレが何だと？」
「何って……、人間が、獣になるなんて、ありえないじゃないですか。おっしゃる意味がよくわかりません」
そう言うのが精一杯。
柳澤の視線は更に容赦なく和泉を追い詰める。
「ありえない、と言っておきながら、君は食堂で、何を調べてたのかな？　狂犬病……リカントロピー……、人狼症……。『狼男』にまつわるものばかりだ。正直に言いたまえ、君は魁がそういうモノだってことを知ってるんだろう？」
質問じゃない、尋問だ。強迫観念に、和泉は平静さを失いそうだ。
「知っていたとしたら、……どうなんですか？」
曖昧な返事で、誤魔化す。尤も、柳澤には通用していないことは承知の上だ。
「さあ、どうなんだろうね。君も、薄々、察しが付いていると思ったんだが」
そう言ったっきり、柳澤は口を噤（つぐ）んだ。
車は郊外の閑静な住宅街へと入っていく。高級感溢れる町並みの中に、小さく「柳澤生体研究所」と横書きした表札のある、白亜の邸宅があった。ガレージに車を止め、四人は研究所の中へと入っていった。

柳澤の研究所に向かうのに、主な交通手段がチャリンコ……、我ながら、情けない。財布の中身は小銭で千円。これじゃ、タクシーにも乗れない。
魁は必死に自転車を漕いだ。後ろに、澪が立ち乗りのまま掴まっている。振り落とされないように、ぎゅっと腰に手を回し、背中に顔を埋（うず）めて。

こんなとき、バイクや車の免許でもあれば、ぶっ飛んで行けるのに。――免許があっても、乗り物がなきゃ、駄目か……。逆に、乗り物さえあれば、免許がなくったって、気合で乗りたい心境だ。

ボロアパートからマンションまで、幸いチャリで来ていた二人。そのままの勢いで、チャリに乗り、風を切って走った。

商店街の人の群れを掻き分け、大通りを抜け、柳澤の研究所のある住宅地へと向かう。直線距離で約八キロ、自転車で向かうと意外に遠い。出るだけのスピードを必死に出す。

残暑がキツイ季節、汗だらだらになりながら、必死に漕ぐ魁の背中で、澪は「魁がまだ、本当は彼女のことがすきなのだ」ということを思い知らされていた。もし、自分が同じような立場なら（勿論ありえないのだが）、助けに行ってくれただろうか。もし、私と彼女の立場が逆なら……。考えるのはよそう。考えれば考えるほど、自分が惨(みじ)めになっていく。

柳澤の研究所のある、住宅街へとやってきた。

自転車のスピードが少し遅くなる。

大きな白い邸宅。家主に似合わない、美しい魔王の城、「柳澤生体研究所」だ。

塀の前に自転車を乗り捨て、二人は急いで駆け込むと、チャイムを鳴らした。

「開いてますよ、魁さん、澪さん」

助手がゆっくりと重いドアを開ける。

「悪い、入るよ！」

魁と澪はドアを思い切りよく開き、助手を退けて中へ進んだ。

薄暗く、じめじめした場所。外からは想像できないくらい、不気味な物体が、所狭しと並んでいる。大小さまざまなホルマリン漬け、檻に入れられた獣や両生類、鳥類たち。奇妙な声は、防音材のお陰で外に漏れることはない。更に中に進むと、見覚えのある手術台のある部屋のドア。思い出すだけでもぞっとする。

話し声が、奥の部屋から聞こえてくる。柳澤だ。

「『魁に関わったばかりに、こういう展開になるなんて、想像できなかった』なんて、言うんじゃないだろうね」
「それは……」
和泉の声も。
魁の心臓は否応なしに高まった。
柳澤を信頼していたわけじゃない、だが、今回はあまりに卑劣すぎる。
「――柳澤ぁぁぁぁ！！！！」
魁は鬼の形相で二人のいる部屋に乗り込んだ。

# 第8話

突然の魁の登場に、和泉は息を呑んだ。
柳澤は待ってましたとばかりににやにやと薄気味悪く笑っている。
「和泉に何を話した……？！　何をしたぁ……？！」
全身汗まみれで、息も整わず、つんつんした髪を逆立てて、魁は柳澤を睨みつけた。はぁはぁと、荒い息は、彼の殺気を現しているようだ。
「何を？　たいしたことは話していないよ。まぁ、『野獣』が何なのか、軽く説明はしたがね」
柳澤は実験台の並ぶ室内を悠々と歩きながら、入り口から飛び込んできた魁と澪をちらちらと見た。
室内には実験器具と思われるものが整然と並べられ、不気味な雰囲気を醸(かも)し出している。顕微鏡や試験管、フラスコ……。学校の理科室のような部屋。ブラインドで昼間の光は殆ど入らず、軽く冷房がかかっているが、決して涼しすぎない。壁面に並ぶ、小動物の籠。キーキーと妙な声で鳴いている。
「君と澪が『野獣』で、戸籍から抹消された、死人同然の存在で、私はそれを利用させてもらってるってこと。あとは、『野獣』が、キメラ生物であるということと、『ゲーム』が行われていること……なんかをね」
淡々と話す柳澤。
「それだけ喋りゃぁ……、十分じゃねぇかぁ……！」
実験台の机に、両手の拳を載せ、怒りをあらわにする魁。
「どうして和泉に、そこまで話す必要がある？！　こんなところまで連れてくる必要がある？！」
腹の奥底から、柳澤に対する憎悪が、コレでもかと噴き出してくる。この、ニヒルな眼鏡の奥で、一体どんな悪巧みをしているのか。

頭が燃えてしまうくらい、憎らしい。
「私が……！　私が知りたいと思って、訊いた部分もあるのよ……！　ごめんなさい、魁！」
入り口から一番遠い実験台の机の付近に、和泉が立っている。
柳澤の言うとおり、「話はしたが、何もしていない」状態であることが確認できる。少し、ほっとする魁。
「彼女がね、私の研究というのが、気になるというもんでね。少し……、私が煽(あお)った部分がないとは言わないが。――奇遇なことに、彼女は、私の大学の後輩に当たるらしくてねぇ。彼女の父、橘病院の院長さんとも、普段から仲良くしていただいてるし。縁があった、ということだよ」
鈍く光る眼鏡の下で、ニヤニヤする柳澤の顔が、ますます憎らしくなっていく。
「面白い話をしてあげよう。和泉君、君のお父さんも、『野獣プロジェクト』に、加担している一人なんだよ……。多額の融資と、実験体の提供……。感謝しているよ。本当に。お陰で、私は『野獣』を『キメラ・ゲーム』の中で、ひとつのブランドにすることに成功したんだからね」
和泉は驚いて、腰を抜かした。実験器具の並ぶ棚によろよろと寄りかかり、その振動で起こった、ガシャガシャと音が、狭い室内に響き渡る。
「自分の親は、そんな人間じゃない、とでも？　橘院長は残酷な方だよ？　君もその血をひいているんだ」
「もう、やめろぉ！　柳澤！　彼女にそれ以上、何も言うな！！」
襲いかかろうとする魁を、澪が必死に止める。腰に手を回し、離さない。
汗が飛び散る。額に血管が浮かび上がり、両腕に、力が入る。
「澪、離せ！　あいつは非人間だ！　いつか殺さなきゃならない男なんだ！　それが今なんだよ！」
振りほどこうと、身体を揺するが、澪の細い手が解けずに苦戦す

る。
「駄目、駄目なの！　魁！！　柳澤が幾ら嫌いでも、私たちは彼を殺したりしちゃ、駄目なの！　柳澤がいなくなれば、私たちは、生きていくことが出来ないんだよ！　忘れたの？！」
「俺たちの命なんて、とっくの昔になくなってた！　死んだも同然だ！　――『野獣』にされたときに、俺は死んだんだ……！　こんな命、今更、惜しくねぇんだよ！！」
怒りが一気に開放され、全身の毛が逆立った。
「お前は、最低ヤローだ……！　柳澤ぁぁぁ！！　どこまで性根が腐ってるんだ……。許せねぇ……！！！！」
カッと大きく見開いた目は、ぎらぎらと薄暗い室内で驚くほど不気味に光り、食いしばった歯には大きな牙が。皮膚という皮膚から、灰色の毛が生え、隆々と盛り上がる筋肉。どこからともなく現れた防具が、彼の衣服と毛を覆い、腕には鉤爪を装備している。
魁の顔から、人間らしさが消え、飢えた狼が姿を現した。
はぁはぁと、血肉を欲するかのように、よだれを垂らしながら、荒く息をする。
澪は変化した魁を抱えきれず、思わず腕を離した。
「魁……、やめて……！」
しかし、澪の声は魁には届かない。
突然の変異に一番驚いたのは、和泉。変化の途中までは目撃していたが、完全な『野獣』の姿になっている魁を見たのは初めてだった。元が人間だったとは、とても思えない。あの、優しい魁の面影は、どこにもない。ただの獣が、そこにいた。
和泉は両手で顔を覆い、直視できず、うろたえた。
「アレは、何……？　魁は？　魁は一体、どこに行ったの？！」
信じたくない、ありえない。何も見たくない。
頭が真っ白になる。
「見たまえ、素晴らしいだろう。これが『野獣』と『他の研究所のキメラ』との一番の違い。普段は人間の姿をしているが、感情や戦

闘状態をスイッチにして、いつでも獣に変身できる。……この技術、決して、簡単なものではないんだよ？」
「それに、武具。身体に動物だけでなく、機械を融合させることによって、その能力に合わせた武器、防具になる。最高だ、そう思わないか？」
「ただ別の生物と融合させるだけのキメラなど、美しくはないからね。ここまで辿り着くのに、どれだけの犠牲を払ったことか……」
柳澤の一人舞台だ。自分の技術に陶酔した、狂人がいる。大きく両手を開き、時折魁を指差し、自慢げに和泉に語りかける。
柳澤は嘲（あざけ）るように和泉の傍に歩み寄り、ぽんと肩を叩いた。
「自分の愛しい男の正体に、やっと、気付いたのか？」
恐怖の涙で顔を濡らす和泉に、畳み掛けるように卑劣な言葉を浴びせる柳澤に、魁は我を失った。
「ぐるるるるる……！！！！」
実験台の上に飛び乗り、四つん這いになって牽制する。
間合いを計っているのか、右へ左へ、ゆっくりと身体を揺らし、実験台の上を移動しながら、柳澤へ近づいてくる。
「魁……、私を殺そうなんて、馬鹿なことを考えるんじゃない。やめるなら、今のうちだぞ？」
柳澤は冷静だった。
ゆっくり立ち上がると、魁に、隠し持っていたライフル型の麻酔銃の銃口を向けた。実験台の陰に、こういう状態になることを想定して、隠しておいたようだ。照準を合わせ、引き金に手を掛ける。
「大事な商品を傷つけたくはないが、私も死にたくないのでね……」
――バァン！！
銃声。
とっさに魁の身体は大きくジャンプした。麻酔が右足に当たり、バランスを崩してしまう。柳澤の背後の、実験器具の並んだ棚に激突。ガラガラと音を立てて崩れ去るガラス扉。棚の上から下から、さまざまな物体が雪崩れ落ちる。

何が起こったのか、和泉は一瞬の出来事に理解できず、悲鳴を上げ、頭を抱えている。
柳澤は身体を丸め、回避していた。崩落が落ち着くと、ニヤニヤした顔をそのままに、魁に再び銃口を向ける。
床に打ち付けられ、それでも体勢を立て直した魁。右足に激痛が走ったが、それどころではない。垂れそうな頭(こうべ)を必死に持ち上げ、柳澤を見る。
魁を撃とうと構える柳澤の前に、白い、メスの虎。柳澤を守るように、魁を見据えている。
「れ……澪……」
思っても見ない敵に、魁はひるみ、後退(ずさ)りした。

# 第9話

普段から、戦闘に参加せず、殆ど家の中で過ごしていた、澪。
同じ『野獣』でも、日々を戦闘の中に置く魁とは正反対だった。
戦いを好まない澪が、何故『野獣』として、共に暮らしているのか、わからないわけではない。きっと、自分と同じように、柳澤に死ぬ一歩手前のところを、無理矢理『野獣』にされたからだろう、と、魁は特に澪に訊くこともしなかった。
澪がいなければ、人間に戻れないこともあった。もしかしたら、澪は、そんな自分の、精神安定剤的役割なのではないか、とさえ思う。だからこそ、毎日癒しを求め、彼女と寝る。澪の、気持ちも考えずに……。
「何故、柳澤を守る……？」
目の前に立ちはだかる澪に、魁はショックを隠せなかった。
「駄目……、絶対、駄目……」
『野獣』に変身し慣れていない澪は、喋るのも辛そうだ。荒い息遣いが、魁に苦しいくらい伝わってくる。
涙を滲ませ、唸（うな）る澪に、魁は行き場を失った。
力が抜け、腰を落とす。
――そこへ、五人の研究員たちが、重装備で傾（なだ）れ込み、次々と魁を押さえ込んだ。手を、足を、そして身体の自由を奪われ、全く動けなくなった。
「魁さん、すみません……。教授に何かあっては、困るんですよ……」
耳元で、研究員の一人が囁（ささや）いた。
（わかってる、わかってる。けど……）
どうにも出来ず、自分の身体に上乗りになった研究員たちの体重を支える。
装備が身体に食い込み、――痛い。

「いい子だ、魁。大人しくしていろ。澪、ありがとう。君は自分の役目をよくわかっている」
柳澤は、澪の頭をゆっくりと撫ぜた。
憎らしい柳澤の手が、澪に触れるのが耐えられない。魁は叫んだ。
「澪に触れるなぁ！　澪も、どうしてそんな奴に……！」
「まあまあ、落ち着け、魁」
撫でるのをやめようとせず、柳澤はまだにやにやとして、魁を見ている。
「澪は、お前の暴走を止めるための、『保険』みたいなもんだ。最初から、そういう役割として、お前の側に置いた。試験体のお前が、いつどうなるか、私にもわからなかったものでね……」
悔しい、柳澤は、自分と澪の性格を知ってて、それで澪を側に置いたんだ。柳澤がどれだけ卑劣か、知っていたつもりだったが、ここまで綿密に仕組まれていたとは思わなかった。人の気持ちを簡単に踏みにじり、利用する。不気味にほくそえむ、時代錯誤のようなこの科学者に、自分たちは完全に捕らえられていた、その事実が重くのしかかる。
「せっかくの機会だ、アレを魁に」
柳澤の合図に、研究員の一人が大きな注射器――まるで、猛獣にでも刺すような――を持ってきていた黒いカバンから取り出す。太い注射針。得体の知れない紫色の液体。
「な、何をする……？！」目を見張る。
「悪いようにはしない。ただ、お前がもっと上質な『野獣』に進化するための修正プログラムを積んだナノマシンを、体内に送り込もうとしているだけだ。その他の様々な薬品と一緒にね……。少し痺れるが、我慢しろよ。コレは、お前が『野獣』の姿のときでないと耐えられないと思って、ずっとしまっておいたもんなんだからな……」
渡された注射を持って、魁に近づいてくる。屈み、押さえつけられた魁の左腕に、太い注射針を刺す。

魁は悲痛な叫び声を上げ、悶えだした。
液体が浸透し、全身に伝わっていくのがわかる。冷たく、異様なその液体は、魁の血管に乗って、隅々まで渡っていく。その先から、次第に神経が麻痺し、朦朧としてくる。副作用なのか。身体が言うことをきかない。
「さて……」
空になった注射器を研究員に返すと、柳澤はすっくと立って、和泉のほうを向いた。にやり、と意味ありげに笑うと、ガラスの破片、ばら撒かれた機材を乗り越えて、近づいてくる。
「邪魔が入ってすまなかったね。和泉君」
柳澤の視線が向けられると、和泉はビクッと、全身を震わせた。棚に手を掛け、震える手足で、必死に立ち上がる。
「答えを聞かせてもらおうか？」
「答え……？」
真っ赤に晴らした目、涙を腕で拭い、顔を上げた。
目の前には、取り押さえられ、研究員たちがのしかかったまま暴れる魁、様子を見守る、白い虎、そして、――そんな状況を作り、しかし、いまだ平静保つ科学者、柳澤圭司。
「もう一度言おう。君には、いくつか選択肢がある。『野獣』『キメラ・ゲーム』の存在は、『一般人には知られてはいけない』ルールだって、言っただろう？　――君は知ってしまった。口封じに殺すことは、簡単なんだよ。だが、私の友人でもある、橘院長のお嬢さんだ、自分のこれからを選ばせてあげようというんだよ」
眼鏡の奥の細い目が、更に細くなり、和泉を嘲笑(あざわら)う。
「和泉……、惑わされる……な……」
途切れ途切れの台詞。荒い息遣い。意識を失いかけていたが、それでも、魁は何とか抵抗しようとしていた。
「逃げ……ろ……、早く……」
口が痺れ、思うように言葉が出ない。視界がぼやけてきた。
自分の背後で、何が起こっているのか、それさえもわからないま

ま意識を失いたくないと、魁は懸命に自分を奮い立たせようとした。例えそれが無駄な抵抗であったとしても……。

「まだ、喋る元気があるようだな、あの男は。だが、じきに意識を失うだろう。……いいかい、『キメラ・ゲーム』は莫大な資金で動いている。まかり間違えば、国家が傾いてしまうくらい、裏社会では重要な存在だ。私の言うことをきかない、あの男も、所詮はその大きな舞台の役者に過ぎない。決められたシナリオの中で生かされていることを、理解できるほど、まともな脳みそを持ち合わせてはいなかったと見える……」

散々な言われようだ。

「それでも、立ち向かう姿勢は、必要だと思うわ……」

和泉はやっと、両足でしっかりと立ち、柳澤を直視した。

「例え『野獣』になったって、必死に生きようとしている魁を、認めてあげるべきだと思う……、それは、出来ないの？」

「出来ないね」

即答。柳澤は更に冷たい視線を和泉に浴びせる。

「甘いな、和泉君。そして、若すぎる。世の中にはね、決して外れてはいけない道がある。足を踏み入れたら、もう二度と帰って来れない場所も。魁は私に命を預けたときから、その覚悟が出来ていたはずだ。――君に会うまでは」

「何……それ。私が原因だとでも、言うの？」

「然り。危険因子だ。中途半端に関わってもらっちゃ困る。さあ、どうする？　このままここで殺されるか？　それとも仲良く『野獣』になるか？」

最悪の選択肢。滲み寄る柳澤。棚に寄りかかり、後のない和泉。

冷たい空気の流れ、異様な空間で、和泉はまともに判断できるのか。柳澤の圧倒的な威圧感、バックにある、あまりにも壮大な計画。押し潰される。受け止めるには、重すぎる。

和泉は深呼吸をし、ゆっくりと辺りを見回した。

苦しげに悶える魁、見かねて側に屈み、ぺろぺろと顔を舐める虎。

滑稽(こっけい)で、どこか、切ない。同情からか、愛しさからか、涙が込み上げる。
彼女は静かに目を瞑り、大きく息を吸った。そして、唇をきゅっと結び、柳澤を見た。
「私は……」
「言うなぁ！　和泉ぃ！！　……やめてくれぇぇぇぇ！！！！」
出来る限りの力で叫ぶ魁。
薬の所為か、全身から急激に力が抜けていく。立ち上がろうと踏ん張るも、研究員が五人がかりで押さえつけてくる。歯が立たない。悔しい。
爪で床を引っ掻き、手を握る。
「柳……さ……。やめ……」
意識が遠のいてきた。強制的に眠りに入る。
（駄目だ……。和泉……。こっちへ来ちゃ、駄目だ……）
暗転する視界の奥で、彼女の声が響いた。
「私は……、もし、許されるなら、魁と……」

# 第１０話

秋の月夜に、獣の姿が浮かび上がった。
超高層ビル群の屋上、戦いを制した狼は、勝利の雄叫びを上げる。
足元に散らばるキメラの残骸を踏み潰し、側で待機していた観客に片手を上げ、合図すると、その獣は瞬く間に、人間の男へと姿を変えた。
パチパチと疎(まば)らな拍手。
「魁、変化も大分スムーズになってきたじゃないか。戦い方も以前よりスマートになった。やっと、修正プログラムが効いてきたってことだな」
スーツ姿の七三の男。柳澤生体研究所の所長、柳澤圭司だ。
ジャケットが夜風を孕(はら)んで、パタパタと音を立て、ネクタイが戦(そよ)ぐ。
「そうだな……。『野獣』から『人間』に戻るのは、前は結構辛かった。悔しいが、今はいい感じだよ。流石、教授」
魁は、いやみったらしく近づいてくる柳澤と、その奥で待機する女性に目を向ける。
白衣を着た、若い女性が、彼の視線に気付き、にこりと挨拶を交わす。
「……なんか、大分様(さま)になってきたよな、あいつ」
「悪いが、相当使える。なかなかの逸材だ。お前が出会ったのも、意外と偶然じゃないのかも知れんな」
柳澤は横目でちらりと彼女を流し見た。
女は階段を駆け上がってきた研究所員たちと共に、てきぱきと事後処理を始める。機材を運び、操作し、肉片を始末し……。もう何年も、こんな現場に立ち会っていたかのような、そんな動き。
「橘病院のお嬢さんがこんな血生臭いことをしているなんて、世間にはお見せできんな。よくあの院長が許してくれたものだ」

柳澤は感心したように頷き、手を拱(こまね)いた。
「柳澤……、お前、あいつが橘病院の娘だって知ってて近づいたんだろ？」
魁は柳澤の肩に手を回し、彼女に聞こえないようにコソコソ耳元で囁いた。
「まさか。偶然だ」
「嘘付け。院長ともグルだな」
「憶測でモノをい言うな」
「あそこで俺と和泉が出会ったのが偶然だったとしても、彼女が橘病院の娘でなかったら、こういう結末はありえなかったはずだ」
「何を言い出す」
「でなきゃ『一般人には知られちゃいけない』ことをわざわざ喋るために研究所に呼び込んだりさ、しないだろ？　わかってんだよ、お前の腹黒さは」
魁はぐりぐりと、柳澤の整った頭に、自分の雑把なつんつん髪を押し付けた。柳澤も負けずに、自分より頭半分背の高い魁に、背伸びして頭を押し付ける。
「私をすぐに悪者扱いするな。……私はお前たちの今後を思って、常に行動しているだけだ。可哀想な、私の、子供だからな」
「うへぇ。誰が」
魁は汚いものを触ったかのように、大袈裟に柳澤から離れる。
すっかりぼさぼさになった髪をコッソリと梳(す)き、柳澤は乱れた着衣を直した。
「俺、知ってんだぜ。本当は、和泉にはもう一つ選択肢があったってこと。……『記憶処理』だっけ？　出来るんだろ？」
今日の魁は冴えている。普段難しいことを喋る男ではないだけに、彼は拍子抜けし、絡みづらいようだ。
肘で柳澤のわき腹を突き、答えを急かす魁に、仕方なしに答える。
「――もし、あの場で彼女が、『死』か『野獣』か、どちらかを選んだ場合は、迷わず記憶を消すつもりでいたのは認めるよ。院長の

娘さんだしな。だが、彼女は三つ目の選択肢を作り、選んだ。アレだけ怯えていたにも関わらず、だ。強い娘だよ」
柳澤は、彼女と、その奥に広がる夜景を、眩しそうに眺めた。
彼女はあの時、「魁と同じ世界にい続けるために、研究者として『野獣プロジェクト』に携わる」道を選んでいた。大学を卒業するまでの間は、アルバイトとして、その後、正式にプロジェクトに参加することを約束して。生半可な気持ちではそのような決断をすることはないだろう。彼女なりに、魁という存在とであって、何かしら感じることがあったのだろう。
秋の風が身に染みる。九月も半ばに近づけば、夜はぐっと冷え込む。ただでさえ、都会の風は冷たい。
風に乗って血の臭いがたちこめる。魁の獣の感性がぴくりと反応し、ぞわぞわっと、全身の神経に伝わる。それでも、今までのように自分を失って、捕食に走らないだけありがたい。
「記憶を消してしまえば……、何も、こんな凄惨な場所で、俺の後始末なんてすること、なかったのにな」
魁はポツリと呟いた。
本音を言えば……、彼女には、普通の暮らしに戻ってほしかった。自分と同じ、闇の世界で暮らすことを、避けてほしかった。だが……。
「何言ってんのよ、魁。私は後悔していないわよ？」
後始末を終え、和泉が魁と柳澤へ寄って来る。
真夜中のビルの上でも、彼女の姿は美しく輝いて見える。闇に落とした宝石箱の、その中でひときわ輝く、ダイヤモンドのように。
「ウチのお父さんも、いずれは私に『野獣プロジェクト』のことを話すつもりだったみたいだし。遅かれ早かれ、私はこの中に混じることになっていたみたいよ？」
その笑顔に救われる。迷いのない瞳。こんなにも暗澹とした、残酷なゲームも、彼女の美しさを奪うことは出来ないのだ。
「ところで……、澪ちゃんは？　今日もお留守番？」と、和泉。

「そうそう。俺がヴァージョンアップしたら、すっかり自分の出番がなくなったとかで……、ふてくされてるよ。『柳澤の奴、余計なことしやがって』とか言ってな」
魁の言葉に、柳澤は目を逸らし、こう答える。
「私は、ハッピーエンドは嫌いなのだよ。片方がよくなれば、片方に都合が悪くなる。それが世の中の摂理だ。全てが満たされる結末などありえない。……本当の幸せなどという都合のいいものなど、この世には存在しないのだから」
「そうだな……」魁が続ける。
「あの時、和泉の記憶が消えても、もしかしたら、どこかで俺のことを思い出してしまっていただろうな。……携帯電話の忘れ物、あの時の血のついた服、全部マンションに置き去りだったし。それに、澪のことだって……」
そして、口を噤(つぐ)む。
「澪と、和泉と、どっちを選ぶか、決まったのか？　両方か？」
柳澤の皮肉。カチンと来る魁。
「それは……。今話すことじゃないだろ？！　撤去だよ！　撤去！！　戦闘は終わったんだから、これ以上ごたごたを増やすなよ、柳澤！！」
いつもはにこりともしない柳澤が、ぷっと吹き出し、大声で笑い出す。つられて、魁も和泉も、コレでもかとばかりに大笑いする。
風は冷たい。身体の芯から凍らせるほどに。夜の闇も、果てしなく暗い。その黒に呑み込まれてしまえば、身も心も、堕ちる所まで堕ち、どんどん黒く染まっていく。
それでも……、月が夜空に輝くように、己の命を煌(きら)めかせる、眩しすぎるほどに。
満月に近づいた月が、今日は一段と輝いている。
澄み切った夜空、雲ひとつない。
『野獣』たちは、幻影のように、闇へと消えていった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2131c/

野獣

2010年10月8日14時04分発行